

六十年前の惨事

児玉 寛嗣

自宅から十分ほど歩いたところに浄正寺というお寺がある。何の変哲もない寺だが、門の傍の石柱が目を惹く。「三河島事故慰霊聖観音安置」と朱書きで刻まれている。その色が事故の悲惨さを想起させる。

事故は寺の近くを走っている常磐線の線路上で起きた。ちょうど六十年前、昭和三十七年五月三日の夜のことであった。最初、引き込み線の貨物列車が脱線して先頭の蒸気機関車と二両目のタンク車が横の下り線に飛び出して止まった。そこへ上野方面から来た電車が突入して脱線し、先頭二両が隣の上り線を塞ぎ止まった。乗客は電車から降りて、上りの線路上を歩いて避難していた。そこへ上りの電車が突っ込んできた。乗客に気付いた運転手は慌ててブレーキをかけたが間に合わず、線路上の乗客を次々とはねて、上り線を塞いでいた電車に激突して一部の車両は崖の下に転落した。

死者、百六〇名、負傷者、二九六名を出すという大惨事となった。実家がそこから近い妻の話によれば、当時中学生だった兄たちが事故現場を見に行ったが、その日は食事も喉を通らなかつたそうだ。凄惨さによほどショックを受けたのだろう。

本堂の前の「三河島事故慰霊碑」と書かれた台座の上に観音像は安置されている。台座の裏には犠牲者の氏名と年齢が五十音順にびっしりと刻まれている。十代から三十代が多く高齢者はわずかだ。当時の人口構成が垣間見られる。命日から日を置かずを訪れたからか、慰霊碑はいっぱいの花で埋まっていた。その年は五月四日が日曜日であり事故が起きたのは三連休の始まりの日であった。今と違って大型連休もない頃のこと、この連休を楽しみにしていた乗客も多かつたらう。

事故を契機にATS（自動列車停止装置）の設置が急速に進んだ。その後、技術も進歩して安全性が向上し悲惨な列車事故は減ったはずだが、今世紀に入ってから百名以上の死者を出したJR福知山線脱線事故などが起きており、まだまだ後をたたない。